

人は何のために生きるか

鎌 田 康 男

現代日本に生きる私たちは、豊かで便利で恵まれた生活を営んでいます。ですから日々の生活を秩序正しく送っていけば、不安なく人生を過ごせる、と考えます。今や大人の世界にまで浸透したゲーム文化は、ほかから与えられたルールをそのまま受け入れて、できるだけうまく—自分に有利にゲームをプレイすることを人生と考える現代人のメンタリティを反映しているかのようです。しかし、ゲーム的人生によって批判精神のない人が大量生産されることはないでしょうか。さらに、人間がもはや、心を通わせ理解しあう生きた人ではなく、ゲームスティックによって操作できる対象としか見えなくなる危険さえ感じられます。そのような生き方に対し、「このままでよいのだろうか」と自問する批判精神も必要です。自分に対する批判精神のないところに、良心も輝く理想も育たないでしょう。良心や理想など持とうとするなどばかげたことだ、と言い放つ人すら現れてくるかも知れません。

聖書には、神が天地を創造された、と記されています。また世界の終わりとは最後の審判についても語られています。仏教を奉じる日本でも平安時代には末法思想が広がりました。現代人はそうした考えを、科学を知らない人々の迷信と片付けたがります。しかし、昔の人びとは、それらの教えによって、どんなに当たり前に見えるものでもくつがえることがある、終わりがあるということ—自分の慢心に対する自己批判精神を養っていたのです。それを、「いつか死ぬことを忘れるな」、あるいは、「諸行無常」と表現したのです。

私たちは、「今」、「ここ」にあることが当たり前であるかのように日々を生きています。しかしまだ生きていなかった、生まれる前の時があったのと同じように、当たり前の中の人生が終わる時—死ぬ時がかならず来ます。人間にとっての「生命の尊厳」とは、今、ここを当たり前として無反省に生きるのではなく、限られた人生の時間として、限られた出会いの空間としてどのように生きるのかを、目覚めた心で考えることができる、ということではないでしょうか。

その時私たちは、多くの人に支えられながら、今、ここに生かされていることの不思議さと、ありがたさに気付きます。聖書の記者が、わたしたちは神の恵みによって生かされている、と述べる時、そのような感謝の思いもこめられていたのだ、と思います。それは今、ここに生きていることへの不思議に驚き、自分が生きることの意味と、なすべきことを考え、そのような生を積極的に生きることの充実感を私たちに伝えようとするメッセージなのです。

(総合政策学部教授)